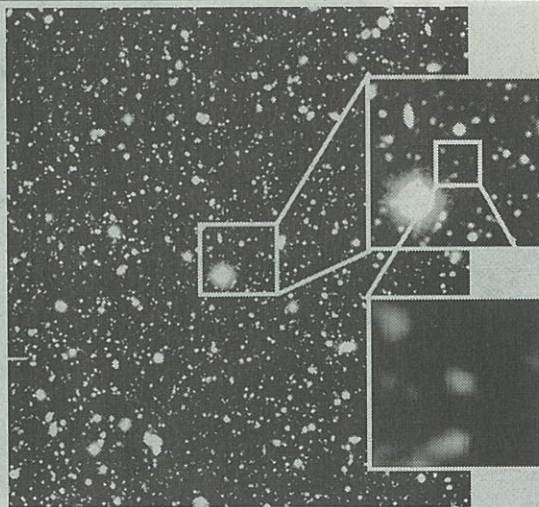


128億8000万光年の彼方

すばる望遠鏡がとらえた
観測史上地球から最も遠い
銀河(右下の枠の中央)
(国立天文台提供)



最遠の銀河

地球から128億8000万光年(1光年は約10兆キロ)も離れた観測史上では最も遠い銀河を、国立天文台や東京大、京都大などの研究チームが「すばる望遠鏡」(ハワイ・マウナケア山頂)を使って発見した。14日発行の英科学誌「ネイチャ」に発表した。

これまでの最遠の銀河より約6000万光年遠くにあり、137億年前の宇宙誕生(ビッグバン)から7億8000万年後の初期宇宙に、確実に銀河ができていたことが確認された。

研究チームは、宇宙の奥深くで遠ざかっていく銀河を観測するのに適した特殊なフィルターを開発。すばる望遠鏡に取り付け「春のかみのけ座」の方向で銀河を探索した。その結果、最遠銀河の候補が2つ見つかり、そのうちの明るい方の光は128・8億光年かなったの銀河であることを確認した。もう一方の暗い天体についても、解析による確認を行っている。

研究チームの家正則・国立天文台教授によると、同じ方角では地球から128・2億光年前後の極めて遠い銀河が10個ほど見つかった。今回の銀河が見つかったあたりでは銀河の候補が少ないことから、128億8000万年前からの約6000万年前の間に宇宙の姿が大きく変わったことが示唆されるという。